

4年制大学における1年生の観察実習から 指導計画立案へ及ぼす効果に関する研究

—4件法とText Mining (KH Coder) による分析を通して—

児童学科 前田 和代

1 問題と目的

本研究の目的は、4年制大学における1年生の観察実習から指導計画立案へ及ぼす効果を明らかにすることである。保育養成校の4年制大学の多くは2年生以降に保育の実習が始まることが多い。それまでは保育の理論を中心に学ぶことにより理論と実践を繋げて学びに反映することが難しい。特に、保育の計画の授業の多くは指導計画の立案について学ぶが、実践経験のない学生にとっては指導計画のイメージが難しく、理論と実践のつながりを得ることが困難である。一方、実習に参加するまでに指導計画立案や書き方を習得していかなければならず、学生にとってはますます実習への不安を大きくする材料ともなっているといえる。

これまで、保育の実習への不安を取り上げた研究は多々みられる¹⁾。その中で、黒澤は、初めての実習で学生が不安感をいだくが、実習という実践を通してその不安が弱まっていくことを明らかにしている²⁾。学生が実習に慣れていくことや実践を通して学びを得ている。つまり、実習という実践を経験していくことで様々な不安が解消されていき、学びが深まっていくのである。そこに、実習の意義もあるといえる。また、理論と実践のつながりから、実習と他教科に関する研究が見られる。例えば、梅澤らは、実習と連携して保育内容科目（造形表現）の教育内容や方法のあり方について示している³⁾。工藤は、保育内容「人間関係」領域と実習における振り返りから指導計画作成の授業について考察している⁴⁾。工藤の実践は、「保育の構想力を育成するために、指導計画（主活動の指導案）の作成を通して、理論と実践を結び付ける授業となっている。保育内容人間関係の授業の一環として幼稚園実習中の人間関係に関わる事例から子どもを理解し、それを基に指導計画の作成についてグループ討論を行っている。その結果、実習で実際にみた保育者の援助については指導案に反映されやすいが、発達過程や発達の年齢的傾向、各々の発達のつながりを考慮して立案することの困難さを課題に挙げていた⁵⁾。花田も、図画工作の授業と実習経験における学習効果について明らかにしている⁶⁾。花田によると、本授業の構成は、「実習」と「授業」との「往還型カリキュラム」として捉えられ、「図画工作」においても「授業」で学んだことを「実習」で実践し、実習での課題をさらに「授業」で学ぶことができるようになってきているという⁷⁾。この往還型はまさに理論と実践のつながりを持つ学びといえる。これらの研究から、実習経験は様々な授業科目における理論と実践がつながる契機となっているといえる。さらには学生が理論と実践をつなげてより理論と実践のそれぞれの学びを深めていくことができるといえる。実習が他の教科への学びを深める要因になることや、教科の学びが実習の学びへ繋がっていくのである。

しかし、研究対象の実習の多くは免許、資格に関わる4年制大学では1年以上学んでからの2週間というある程度期間がある実習が対象であった。そのため、実習に慣れてくることや学びと往還することも可能であったことが考えられる。そこで、免許や資格に該当する実習以外の実習についての先行研究については以下のような視点が明らかにされている。林らは、数十名の学生が資格・免許状に係る実習前に1時間半の見学実習を行い、その後の実習にどのように生かされていくのかという視点から考察を行っている⁸⁾。その結果、やはり理論と実践の結びつきの実感や、実習で行うことへの気づきがあったことの効果を挙げている。三澤は、幼稚園での観察実習と日誌指導の授業実践の効果について考察している⁹⁾。その中でも

短時間（1時間半）の実習からも日誌の書き方について効果があることを明らかにしている。また、他の学科ではインターシップや見学実習などを取り入れ、理論と実践を繋げている¹⁰⁾。しかし、これらの研究対象の実習の多くは、いわゆる学生が一斉に短時間に見学する形が多く、資格や免許に係る実習の形態と異なる場合が多かった。そのため、実習生としての自分で考えて行動することや自己課題や目標を持っての実施にはやや難しさがあるといえる。

以上の課題を踏まえ、本研究では、本大学が新たに試みた4年制大学における1年生の観察実習での学びが授業における指導計画立案にどのような効果や役割があったのかを検討する。

2 研究方法

(1) 研究対象

観察実習を経験し後期授業「保育の計画と評価（1年生後期科目）」を受講した学生に最後の授業終了後、授業の振り返りとして4件法と自由記述のアンケート調査を行った。対象学生は110名（回答率100%）である。

(2) 自校附属園実習について

本研究の対象となる1年生の観察実習とは、附属幼稚園型子ども園における前期、後期各1回ずつの観察実習である。対象となる自校附属園実習が開講された背景は、次の通りである。本校の学部では本実習が2年生の春休みから始まる。つまり、保育の学びが始まった2年後にあたる。そこで、「机上の理論だけを学ぶという中で、保育者になりたいという入学当初の目的が曖昧になるという悩みを抱える学生も存在していた。このような理由から、学科では、これは、4年制での保育者養成課程における問題だと感じ、改善の方法を模索してきた。このような経緯から、新たに、保育を学びたいと意欲をもって入学してきた学生が1年次から保育現場に実際に入ることで、保育を学ぶことへのモチベーションを高めること、また、理論と実践を結び付けながら学びを深めていくことをねらいとして、「自校附属園実習」という科目が1年次に設定された。」のである¹¹⁾。また、「幼児教育の重要性が強調される中で、新たな幼稚園教員養成課程においては、特に、各領域の「保育内容の指導法」の授業においても、指導計画の作成と模擬授業の実施、並びに振り返りを行う内容が必須となったことが挙げられる。具体的には、指導計画の作成、模擬授業、振り返りをするにあたっては、実際の子どもの姿や保育者の援助について実習として観察したり、それについて考察することが基盤としてないと、こうした指導が極めて形式的なものになってしまい、その成果を十分に果たすことが困難と考えたからである。」¹²⁾

以上の背景を踏まえ、保育実習や幼稚園教育実習と同様の実習の授業として、まず、実習の諸注意を含む事前指導を行う。その後、順に観察実習を実施する。該当年度は、毎日10名の学生が各クラスに配属され、配属クラスにて観察実習を行った。実習時間は8:30～14:00（昼食は休憩含み別室でとる）、登園前の掃除、準備、保育の観察、保育者の補助、保育後の掃除、保育準備などが実習内容である。実習後はエピソード記録を提出する。全員の実習終了後に事後指導として、エピソード記録をもとにグループワークを含む振り返りを行う。尚、エピソード記録は他者が閲覧できるツールによる提出方法としている。

(2) 分析方法

1) 4件法による質問について

まず、授業「保育の計画と評価」にて指導案を作成するうえでの理論の理解と構想についての問である計画全体に関する2質問については、「かなり深まった」「深まった」「あまり深まらなかった」「深まらなかった」の4件法で行った。指導案を作成するときの各項目についての問である指導計画立案に関する7

質問については、「かなりイメージできた」「イメージできた」「あまりイメージできなかった」「イメージできなかった」の4件法で質問した。まず、各質問における回答の分布を行った (Table 1)。そして、「かなり深まった」「深まった」を「深まる」、「あまり深まらなかった」「深まらなかった」を「深まらない」というように名義尺度化して、かい二乗検定を行い (Table 2)、分析し考察を行った。

表1 授業「保育の計画と評価」の振り返りについての4件法による質問項目

質問1	子どもの姿、計画、実践、反省評価というサイクルについて 実際の保育を観察することにより理解が深まりましたか (1かなり深まった 2深まった 3あまり深まらなかった 4深まらなかった)
質問2	サイクルの中で起こる保育者の願い (意図) と子どもの思いのズレから 再構成していく環境構成や保育実践、援助について実際の保育を観察することにより理解が深まりましたか (1かなり深まった 2深まった 3あまり深まらなかった 4深まらなかった)
質問3	指導案作成について 全体構想を考えると (1かなりイメージできた 2イメージできた 3あまりイメージできなかった 4イメージできなかった)
質問4	指導案作成について 子どもの状況の欄を書く時 (1かなりイメージできた 2イメージできた 3あまりイメージできなかった 4イメージできなかった)
質問5	指導案作成について ねらいと内容の欄を書く時 (1かなりイメージできた 2イメージできた 3あまりイメージできなかった 4イメージできなかった)
質問6	おおよその時間軸と環境構成を書く時 (1かなりイメージできた 2イメージできた 3あまりイメージできなかった 4イメージできなかった)
質問7	指導案作成について 子どもの活動を書く時 (1かなりイメージできた 2イメージできた 3あまりイメージできなかった 4イメージできなかった)
質問8	指導案作成について 実習生の援助と留意点を書く時 子どもの発達の視点について (1かなりイメージできた 2イメージできた 3あまりイメージできなかった 4イメージできなかった)
質問9	指導案作成について 実習生の援助と留意点 保育者の具体的な援助を考えると (1かなりイメージできた 2イメージできた 3あまりイメージできなかった 4イメージできなかった)

2) 自由記述について

自由記述については「保育の計画と評価の授業を学ぶ際、自校附属園実習で学びがどのように反映されたか具体的に書いてください。」という問のもと回答を得た。自由記述の分析に適している Text Mining (KH Coder) の手法を用いて、具体的な検討を行うこととした。Text Mining (KH Coder) 分析を通して自由記述の頻出語を可視化する。まず、①総抽出語数から特徴語の可視化を行う。さらに②共起ネットワークにて、カテゴリー化された抽出語の共起関連について示していく。以上のように、分析し考察をする。

表2 学生の回答例

<p>・実際の子どもの姿をみることでできたため、3～5歳児がどの程度発達しているのかイメージしやすく、○歳児への保育者の援助はこんなことが必要、△歳児はここまで大丈夫、などと発達や実際の保育と結びつけながら考えることができた。また、絵本の指導計画を立てた際や実践するときには、先生はどうやって読んでいたか、子どもたちに反応していたかを思い出し参考にすることができた。真似しようと思っていてもなかなかうまくいかなかったの、絵本を読むだけでも簡単そうに見えて多くの技術が必要なのだと実感した。</p>
<p>・5歳児が外遊びをしている時に、1つのものを見つけて、それを周りに見せたり周りの子たちが寄ってきたり、どんどん興味が伝染し、クラスの半分以上の子を巻き込んで、その後それを遊びにつなげていたのを見て指導案を考えると、導入次第でその活動により興味をもって取り組むのだろうなと思った。また、年齢によって言葉の発達が驚くほど違い、4歳児は教える時、言葉でうまく伝わらず、やってあげてしまう光景が多かったが、それに比べて5歳児は言葉で説明していたのを見て、コミュニケーションをとる遊びを取り入れて指導案を作ろうと考えた。</p>

・自校附属園実習では、年少児クラスを観察しましたが、担任の先生の援助（言葉がけや子どもに見せる反応）が自然で、部分実習の実践にも多く役立てられる子どもが楽しく過ごせる要素を感じました。また、授業内で教えていただいた学びの中での、優しくあたたかい保育がもたらす子どもたちへの良い影響を感じることができました。実際に指導案を書くとき、意識的に気をつけなければいけない表現などには悩むことが多かったのですが、それらすべてが子どもたちへの優しくあたたかい保育のためであり、子どもが楽しく過ごすために必要なことだとわかりました。授業での学びを今後の実習などに活かし、実践していきたいです。

・実習のクラスで本棚を見たときには絵本の中身を見て、どれくらいの文字なのか、どんな種類の絵本を読んでいるかを知ることができました。その学びを活かして、絵本の読み聞かせの指導案作成時には、子どもの発達や興味・関心に合わせたものを選ぶことができました。また、給食の準備をする流れなどは、実際に見たことで、指導案では活動が終わって給食になめらかに続ける方法を想像しやすくなりました。観察実習での学びをもとに授業を受けることができたのでよかったです。

(3) 倫理的配慮

倫理的配慮として、アンケート調査を実施した該当学生には、アンケートのデータは個人が特定されたり、個人の不利益になったりしないよう扱い、研究のみの使用であることを文章で説明し、了承を得ている。

3 結果

(1) 質問項目について

1) 各項目のアンケート結果 (Table1)

まず、計画全体に関する2質問については、「かなり深まった」「深まった」の項目への回答が90%を占めた。質問1については、「かなり深まった」「深まった」の回答が多かった。学生は実習園での保育者の計画は見えていないのだが、保育者の準備や保育実践や環境構成を観察することで、準備と実践のつながりを実感できたことが回答の要因と考えられる。学生なりに、計画と実践をつなげながら観察ができていると捉えることができる。また、質問2についても、「かなり深まった」「深まった」の回答が多かった。登園時から状況に合わせた環境構成の変化や子どもの反応による保育者の関わり方の変化など計画の再構成についての気づきが要因と考えられる。

指導計画立案に関する7質問についても、「かなりイメージできた」「イメージできた」の項目への回答が約77%を占めた。特に、質問4指導案作成の子どもの状況、質問7指導案作成の子どもの活動の項目がよりイメージできた割合が高いことがわかった。実際の子どもの姿を数時間観察したことにより、具体的な遊びの内容や生活の仕方を把握することができ、指導案項目の子どもの状況や活動の姿の記述に繋がったと考えられる。一方で、質問項目6時間と環境構成については、「あまりイメージできなかった」の数も多い。これは指導案のテーマが一斉活動の製作であったこと、実習園は遊び中心であったことから、観察内容と指導案の課題がズレていたため、実習と指導案立案の繋がりが持ちにくかったことが考えられる。また、観察時間が午前中の遊びの時間中心だったことも指導案作成と繋がりにくかったといえる。また、質問項目8発達の視点についても「あまりイメージができなかった」の割合が他に比べると高い。この原因は、やはり一クラスへの配属だったため、他の年齢の子どもの様子を見る機会が少なかったこと、実習生自身が発達の視点をもって実習を行うことが困難だったことがうかがえる。また、やはり遊び場面については発達の視点の理解を得たが活動場面における発達の視点を捉える機会が少なかったことが原因と考えられる。

表3 質問項目1～2におけるアンケート結果

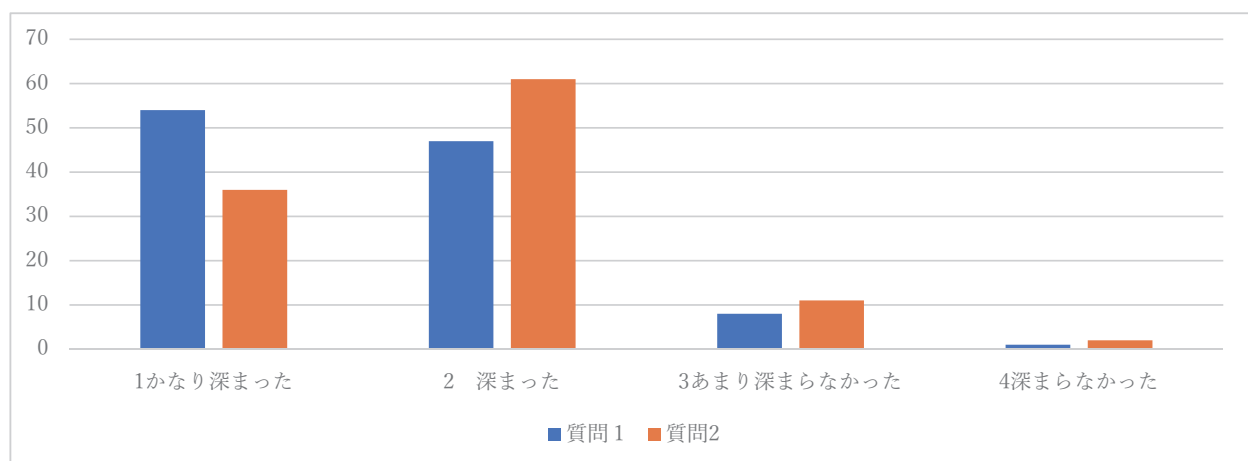
質問番号	1 かなり深まった	2 深まった	3 あまり深まらなかった	4 深まらなかった
質問1	54	47	8	1
質問2	36	61	11	2

表4 質問項目3～9におけるアンケート結果

質問番号	1 かなりイメージできた	2 イメージできた	3 あまりイメージできなかった	4 イメージできなかった
質問3	20	68	22	0
質問4	24	66	18	2
質問5	21	63	26	0
質問6	30	51	29	0
質問7	24	68	17	1
質問8	14	58	36	2
質問9	21	68	21	0

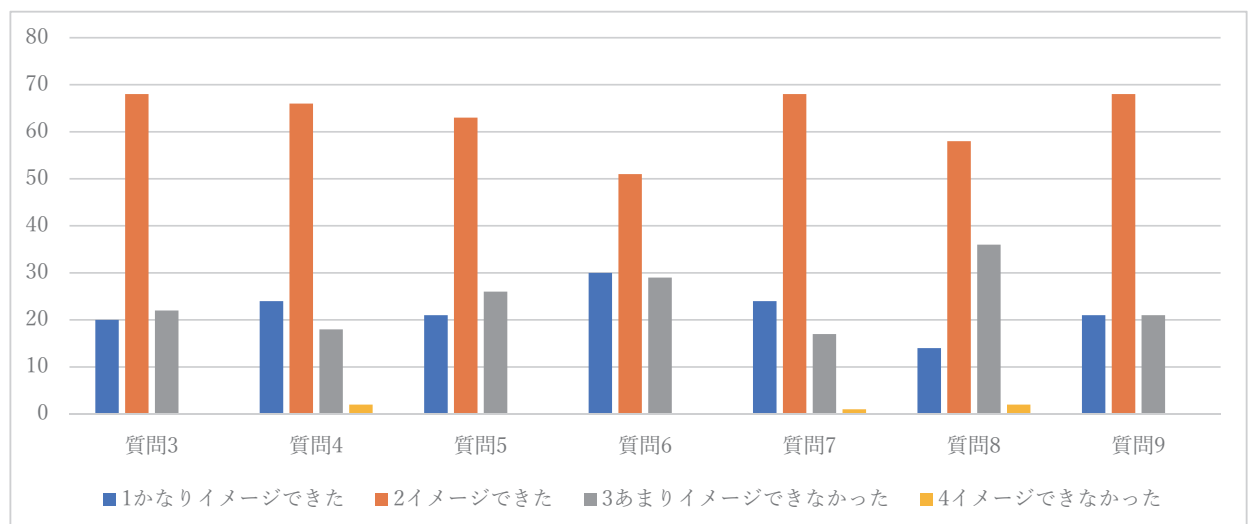
質問1と質問2の回答数の比較を図1に示した。

図1 質問項目1～2の結果



質問～9の回答数を図2に示した。

図2 質問項目3～9の結果



2) 項目ごとの関係性について (Table2)

各項目のアンケート結果から、観察実習で園の流れや、子どもや保育者の様子を見る経験は、全体として初めての指導計画立案に様々なイメージをもたらせていることが明らかになった。さらに、質問項目ごとの関係性を検討した結果は、計画全体の2質問については、有意差が見られた。一方、指導計画立案に関する項目に関しては有意差が見られなかった。この結果から、観察実習で学生が捉えられる内容とそうでない内容があることがわかった。

表5 質問項目1と2の関係性

質問番号	1かなり深まった 2深まった	3あまり深まらなかった 4深まらなかった
質問1 (110)	101	9
質問2 (110)	97	13
合計	198	22

$p < 0.04$

(2) 自由記述回答について

Text Mining (KH Coder) による分析を、総抽出語数 (Table3)、共起ネットワーク (Table4) から導き出した。

1) 抽出語数 (Table3)

総抽出語数の結果は12,551語であった。最も多い抽出語は「子ども」(211回)であった。次に、「実習」(132回)、「保育」(127回)「指導 (84回)」であったことがわかった。

表6 観察実習における授業への反映についての総抽出語数上位20

順位	語	回数	順位	語	回数
1	子ども	211	11	観察	44
2	実習	132	12	行く	42
3	保育	127	13	イメージ	40
4	指導	84	14	計画	36
5	思う	78	15	活動	35
6	見る	75	16	学ぶ	33
7	考える	70	17	感じる	32
8	書く	58	18	参考	31
9	援助	55	19	授業	29
10	自分	46	20	発達	29

表6から、計画についての授業と実習を結ぶ一番の対象であり、学びが「子ども」であると言える。学生は、まず一番に「子ども」の姿を捉え、計画につなげていたことが自由記述からも読み取れることができた。これは、4件法でも子どもの姿の項目の捉えが高いことと比例している結果と言える。次に多い語は「実習」、「保育」である。この2つもかなりの割合で出現している。さらに「指導」の語が続く。「実習」とは今回の回答では「自校附属園における観察実習」をさしている。「実習」「保育」自体が計画の授業に反映されていること、さらには、「指導」案の立案や、保育者による「指導」の姿が計画の授業や反対に計画の授業に実習が反映していると言える。この上位4つの語から、実習が計画の授業への反映だけでなく、計画の授業が実習にも反映されているという双方向性をもっていることがわかった。

次に多い言葉が「思う」「見る」「考える」「書く」と続いている。こちらの語は、すべて語の分類では動詞に当てはまる。そして、学生自身が授業と実習をどのようにつなげていたのか、捉えようとしていた

のかという学生自身の思いが反映されている語と捉えることができる。計画の授業と観察実習をどのように反映させていくのか「思い」、実習でよく「見る」ことを授業に反映させていたのだと言える。また、授業で学んだことをこれからの自身の立案につなげるため「見る」という反映も考えられる。「考える」「書く」もこれらの見解と同様と捉えられる。つまり、学生は、観察実習を計画の授業へ反映させていただけではなく、授業での学びを実習で見る視点として捉えるという反映も行っていたのである。次の「観察」「行く」も「見る」など同様の捉えが考えられる。さらに「イメージ」「計画」「活動」などでは、まさに指導計画の具体に反映されている語と捉えられる。

2) 共起ネットワークによる関連語検索結果について (Table4)

次に観察実習における授業への反映について、出現の似通った語、共起の 程度が強い語同士を線で結ぶ共起ネットワークによる関連語検索を行った。結果は図3のように示された。

図3 観察実習における授業への反映についての共起ネットワーク

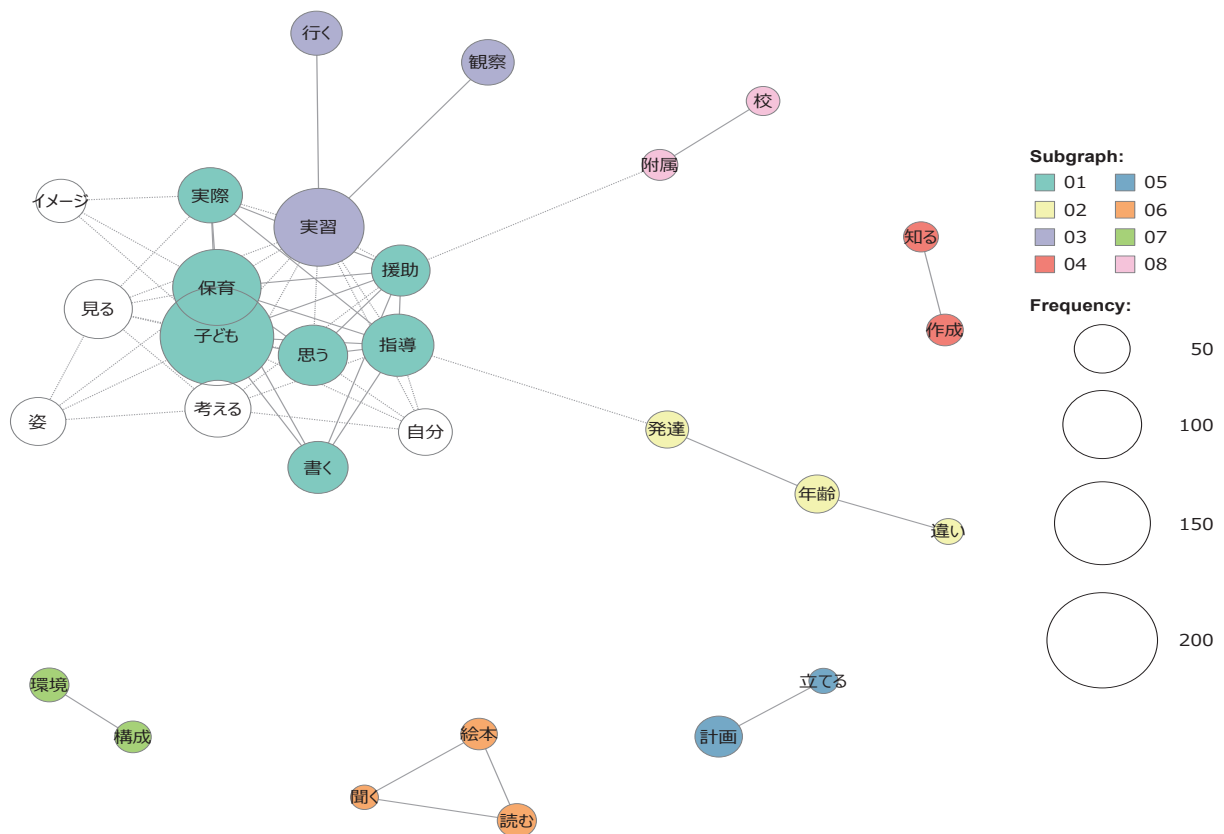


図3から関連語による以下の5つのグループが見いだされた。グループ①「子ども」「実習」「保育」の上位抽出語が多い関連語のグループ、グループ②「作成」「知る」の関連語のグループ、グループ③「計画」「立てる」の関連語のグループ、グループ④「絵本」「読む」「聞く」の関連語のグループ、グループ⑤「環境」と「構成」の関連語のグループである。

グループ①では、もっとも多い抽出語は「子ども」(211回)であった。上位抽出語である「実習」(132回)「保育」(127回)がこの2つと大きく関連していることがわかった。そして、この語の関連語には上位抽出語である「思う」「見る」「考える」がある。つまり、「子ども」「保育」「実習」について計画の授業、指導案作成と観察実習について「思う」「見る」「考える」という行為として反映していることがわかる。

「実習」関連語には「援助」「実際」「指導」の語があり、これは実際の保育者の姿を捉えていると言える。さらにその関連語として「自分」や「イメージ」があり、保育者の実際の援助を自分なりに捉えたり、計画の授業や指導案作成への「イメージ」としてつながっていると捉えられる。さらに、「指導」の関連語には「発達」「年齢」「違い」と繋がっており、年齢による発達の違いを実習での学びからつなげているのである。また、「子ども」の関連語には「見る」「考える」さらには「姿」があることから、「子ども」の「姿」を「見る」と同時に「考える」という行為も行っていると言えられる。これは、学生なりに子どもの姿と視点をもって捉えようとしていると言える。つまり、計画の授業での学びの視点をもっていていると言える。

次のグループ②「作成」「知る」の関連語からなるグループは、指導案の作成において、新たな発見があった、学びがあったとの解釈ができる。指導案を通して知るという捉えである。また、知ることにより指導案に繋がったという解釈の2方向性が考えられる。

グループ③「計画」「立てる」の関連語によるグループでは、まさに「計画」を「立てる」という一連の流れが関連語としてひとつのまとまりになったと言える。

グループ④「絵本」「読む」「聞く」の関連語からなるグループでは、これは絵本の部分実習の指導案作成を反映させたものである。「絵本」について自分自身が「読む」という指導計画や模擬保育、現場での保育者の実践を「聞く」経験が反映され、3つの関係がグループとして成り立っていると捉えられる。

グループ⑤「環境」と「構成」の関連語からなるグループは指導計画における項目の「環境構成」を反映された関連語と捉えられる。つまり、このグループは指導計画の項目である「環境構成」の特化したグループであり、指導案作成の項目に独自に反映していると言える。

4 総合考察

(1) 実践を捉えた指導計画の作成の意義

これまで指導案作成において学生は子どもの姿がイメージできず苦戦していたが、今回の結果から観察実習により子どもの姿をより具体的に捉えられる効果があった。観察実習で園の流れや子どもや保育者の様子を見る経験は初めての指導計画立案に様々なイメージをもたらせている。子どもの姿をイメージして指導計画の作成を行うことにより、指導計画の各項目作成への困難が軽減される。さらに観察実習で出会った子どもをイメージすることにより、自分が立てた計画をその子どもたちはどのように展開していくのだろうかという、より具体的な構想に繋がることが考えられる。つまり、指導案の書き方、書く内容の習得だけでなく、保育者として子どもにとってどのような計画が意味があるのだろうかという子ども理解を含めた構想にもつながるのである。そして、それらの構想は保育者を目指す学生にとっては、対象の子どもをイメージできることは立案が楽しみにもなるといえる。指導計画の作成がやらねばならないことから、子どものために楽しく取り組めることに変化することに子どもと共に保育を作る視点もたらされるのである。しかし、保育内容と指導案立案の課題が異なるとつながりにくい項目があるという課題も見いだされた。その点については、指導計画の作成に授業内容に、子どもを見る視点を教授していく必要性があるといえる。

(2) 理論と実践の相乗効果

特に今回対象の観察実習は学生が順に実施する形式のため、授業の指導案作成における項目、つまり何を書くのが明確になると、その視点をもって観察実習に参加する学生がいる一方、先に実習を経験した場合は、見てきたことを各項目に自分ですり合わせながら指導案の立案や作成につなげている学生がいた。また、対象実習では、実習の記録を学生同士が共有できるようになっているため、さらに観察したい視点を他の学生の記録から読み取ることができる。そのため、指導計画の作成をすり合わせが何度も行える。つまり、学生は理論から実践、さらにその逆も行っており、理論の学びと実践を往還させながら、

指導案作成の構想や計画の全体像、各項目に書く内容を反映していることが考えられる。

5 今後の課題

本研究では、4年制大学における1年生の観察実習が保育の計画と評価の授業内容、指導計画の作成について及ぼす効果について4件法とText Mining (KH Coder) の方法を用いて分析した。その結果、授業における理論と実習における実践の往還、それぞれに及ぼす効果について明らかになった。今後はこの往還について、観察実習からは様々な授業へどのような効果があるのか、授業から観察実習へどのような効果があるのかという双方からの視点を捉え、理論と実践の往還についてより具体的に検討していくことを今後の課題とする。

謝辞

本研究におけるアンケートの承諾、協力をいただきました学生に感謝いたします。

引用・参考文献

- 1) 佐藤友恵他 (2021) はじめての保育実習を控えた学生の不安と期待に関する研究 武庫川女子大学院 文学研究科教育学専攻「教育学研究論集」(16) 18-26 ・矢野洋行 安東綾子 (2021) 学生の保育実習への不安に関する検討 (1) 保育実習を通してどのように変化するか 九州女子大学紀要58 (1) 75-85・中原大介 (2019) 保育者養成教育における実習不安に関する一考察 福山平成大学 福祉健康学部 福祉健康科学研究14 (1) 65-75 など
- 2) 黒澤寿美 (2019) はじめての実習に対する不安感に関する考察 環太平洋大学研究紀要 (14) , 179-183
- 3) 梅澤啓一・山崎土来見他 (2002) 実習と連携した保育内容科目 (造形表現) の教育内容・方法のあり方について-大学付属幼稚園と協力関係を通じて- 日本美術教育学会284号 2-12
- 4) 工藤英美 (2017) 「人間関係」領域における保育構想力の育成に関する一考察-幼稚園実習の振り返りと指導計画作成の授業を通して- 愛知県立大学生涯発達研究所 生涯発達研究9号109 - 113
- 5) 前掲4)
- 6) 栴田千絵 (2017) 「図画工作」の授業と幼稚園実習における学習成果：アンケート調査から 作新学院大学女子短期大学部紀要 (第1号) 92 - 99
- 7) 前掲6)
- 8) 林富公子・田中麻紀子 (2017) 付属幼稚園見学実習について 夙川学院短期大学 教育実践研究紀要 第10号63-69
- 9) 三澤恵 (2016) 幼稚園での観察実習と日誌指導の授業実践と効果-学生の主体的な学習を重視した教育実習指導の検討- 子ども未来学研究 第11号 31 - 41
- 10) 山本礼二 峯村恒平 他 (2019) 教育実習 I (観察実習) での学びに関する一考察-学校インターンシップの展開に向けて- 目白大学高等教育研究 第25号 107 - 116 ・下里理枝 (2017) 就学前保育・教育施設へのインターンシップの効果と課題：大学1年生のインターンシップの場合 教育総合研究業書 10号 29-39 ・清水将他 (2018) 教職大学院における付属幼稚園実習の意義 岩手大学大学院教育研究科研究年報 第2巻 117-124 など
- 11) 前田和代他 (2020) 4年生保育者養成における1年次実習実施についての一考察-実習授業科目「自校附属園実習」の概要と学修成果の報告を通して- 東京家政大学教員養成教育推進室年報 (9) , 31-39,
- 12) 前掲11)

- ・長沼貴美・佐藤美香（2016）保育園体験実習が大学生の子どもに対するイメージ及び学習意欲に及ぼす影響 創大教育研究 第36号 65 - 74
- ・菜原桂子 小林美花（2017）幼稚園教育実習・保育所保育実習における指導案の現状と課題 北翔大学短期大学部研究紀要55 139-145
- ・林理恵（2018）短期大学保育学生の保育指導案作成に関する考察－幼稚園実習での学びに着目して－幼年教育WEBジャーナル 第1号 13-20
- ・梅澤実 小林貴史他（1998）大学2年生の観察実習における試み：「反省的実践家」形成の基盤としての模擬授業体験の位置づけとして 東京学芸大学附属学校研究紀要25 107-117
- ・大井桂子 吉田若葉（2012）4年制での保育者養成における幼稚園教育実習指導試案（1）－幼稚園現場との協働の模索－北陸学院大学。北陸学院大学短期大学部研究紀要 第5号1 - 14
- ・大井桂子 熊田凡子 向出圭吾（2014）4年制での保育者養成における幼稚園教育実習指導試案（2）－実習生の指導計画を通して見えた幼稚園と大学の実習像－ 北陸学院大学。北陸学院大学短期大学部研究紀要 第7号 11-26
- ・向出圭吾（2015）4年制での保育養成における幼稚園教育実習指導試案（3）－実習協議の内容の充実－北陸学院大学。北陸学院大学短期大学部研究紀要 第8号 123-132
- ・谷塚光典他（2018）附属学校園における教育実習研究授業・研究保育を参観した教員養成初期段階の学生の意識－校種の違いに着目して－ 日本科学教育学会年会論文集（42） 515-516
- ・岩本廣美他（2005）保育参加による大学授業の改善-附属幼稚園との連携による「幼児と環境」の実践を通して 奈良教育大学学術リポジトリ 教育実践総合センター研究紀要 14巻 157-169

尚、本研究は日本保育者養成教育学会第5回、日本保育者養成教育学会第6回大会にて発表した内容に加筆修正をしたものである。